

「錦江湾」の由来について

栗林文夫

はじめに

黎明館である時、来館者から錦江湾の語源について質問を受けた。恥ずかしながらこの時、錦江湾という言葉の由来については全く知らず、あわてて地名辞典などを調べたが、よくわからなかった。

その後、インターネットを利用して調べてみると、島津家久が詠んだ和歌「浪のおりかくる錦は磯山の梢にさらす花の色かな」が、鹿児島湾を錦江湾と呼ぶようになった起源で、後に加治木島津家第六代久徴が日木山川河口に、「家久公の歌にちなみ、前の海を錦江と呼ぶ」という趣旨の文章を刻んだ石碑を建立しているとあった。質問されたお客様には取り敢えずこの事をお知らせしたが、自分自身何か納得のいかないものを感じていた。

筆者は鹿児島県外の出身であるが、今から二〇数年前鹿児島に来た時、地元の人が、鹿児島湾と呼びずに錦江湾と呼ぶことに少なからず違和感を覚えたことを記憶している。恐らく今でもそうだと思うが、県外の人には鹿児島湾と呼ぶことが多いのではなからうか。何故このような現象が起こったのか。また、鹿児島の人人々にとって「錦江」という言葉は非常に馴染みのある言葉で、例えば町名・地名・橋名・通りの名・学校名・会社名等々、ごく一般的に使用されている。どのような理由からこれだけ広く「錦江」が使用されるようになったのであろうか。

このような問題が、先のホームページでは未解決のままである。そこ

で、これを機会に実際の資料で鹿児島湾がどのように表記されているのか調べてみた。その調査結果が小稿である。

一 江戸時代の鹿児島湾

鹿児島湾を「鹿児島湾」や「錦江湾」等と呼ぶようになったのは、歴史的に見て実はそれほど古いことではない。江戸時代に日本人が書き残した文献を見る限り、今のところ「鹿児島湾」や「錦江湾」という表現は見出せない。それでは、鹿児島湾のことを何と呼んだのか。地誌類から名称を探してみると、「入海」・「鹿児島湾の海」・「裏海」・「内海」等が目にとまる。これらの表現から、江戸時代末にいたるまで鹿児島湾を指す固有名詞は存在しなかったことがわかる。いずれも内海を表す普通名詞を使用して、鹿児島湾のことを表現したのである。もしも鹿児島湾を示す固有名詞が存在したならば、地誌類には必ずや採録された筈である。鹿児島湾沿いで生活をする人々は、目の前に広がる広大な湾を特別の名前を付けて呼ぶ必要がなかったのである。「鹿児島湾」という言葉の発生は、他者による認識を待たねばならなかった（具体的には後の薩英戦争）。

次に、冒頭でも記した「錦江湾」の由来が、島津家久の和歌にあるという説について検討してみたい。『加治木郷土誌』に、「前記久徴の『黒川記』に『家久公の歌に錦波の二字が用いてあるから、前の海を錦江と呼び、山上の花の色がさかさまに影を汀に写す眺めがあるから、別に錦

水と号す』という意味のことが書いてある。それでこの家久の歌から錦江湾の名が起こったといわれている。¹⁶とある。鹿児島県のホームページも恐らく、この『加治木郷土誌』の説を採用したものであるう。

「黒川記」は『三國名勝図会』卷之三十七に収録されているので、関連部分を左に記そう。

往時 太守慈眼公臨流停車、為製国字歌一首、歌中有錦波二字、因此又呼錦江、天錫謹写歌意以韻語廿言云、清時前後日、波紋作錦紋、此是山花色、倒影落江濱、天錫別号錦水、亦因此矣、

（昔、太守の鳥津家久が黒川の流れに臨んで車を停め、国字の歌一首を作った。歌の中に

「錦波」の二字があつた。これによつ

てまた黒川を「錦

江」と呼ぶ。鳥津久

微（天錫）は謹んで

歌意を写して韻語二

十文字を以て次のよ

うに云った。「波が

穏やかな時の前後の

日、波紋が錦紋をな

す。これはこの山の

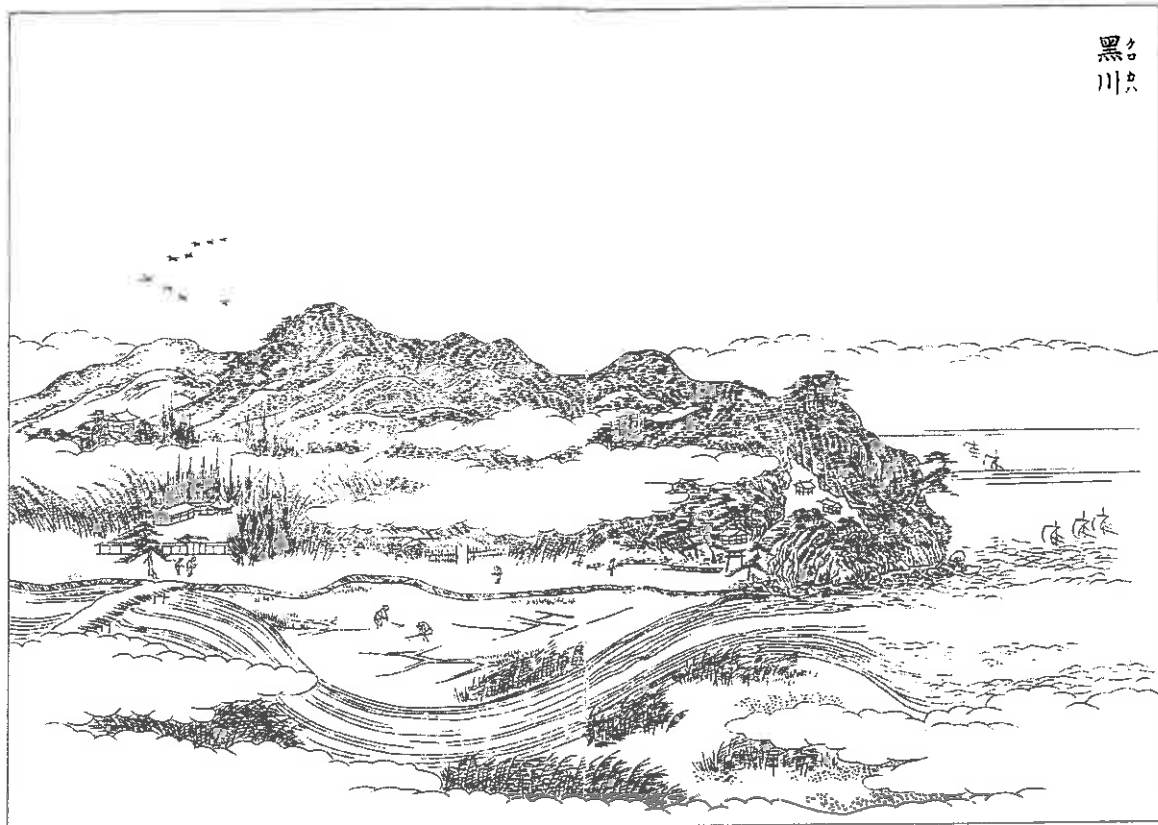
花の色が黒川の濱に

逆さまに映る影が落

ちたものである。」



黒川（日木山川）河口



黒川

（『三國名勝図会』卷之37）

天錫が別に錦水と号するのはこれによる。)。

この原文を読む限り、「家久公の歌に錦波の二字が用いてあるから、前の海を錦江と呼」ぶとは読めない。あくまでも錦江と呼ばれたのは黒川である。この「黒川記」を典拠として、「錦江湾」の起こりを説明することはできない。家久の和歌から黒川の別称「錦江」が起こったということを言っているだけなのである。『三國名勝図会』は黒川の説明で、「此川、又は錦江といふ、公の歌語、錦波の字あるに因て、名を得たりといふ」と記している。この時はまだ「錦江」が海を指す言葉として用いられていなかったのである。家久の和歌がきっかけで黒川に「錦江」という別称が生じた。その別称がいついかなる経緯を経て海を指す言葉に転化したのかは、現在までのところ史料の根拠を見出すことができないのである。

『加治木郷土誌』のこのような「黒川記」解釈は、実はこの他にも見られる。例えば川寄兼孝「錦江の呼称の由来」¹⁶⁾には、「黒川河口の入り江に錦江の名を付けたのはこの久徴であったと考える。」「黒川河口の入り江を錦江と詠い始め」等とあり、錦江の範囲を「黒川河口の入り江」としている。なるほど漢和辞典を調べれば、「江」には、「入り江、海や湖水の陸地に入り込んだ処」¹⁷⁾とある。『三國名勝図会』が載せる黒川の図は、河口部が広がり、入り江状になっているように見える。しかしこれは、漢和辞典に見える「江」の字義に引き込まれすぎた解釈ではなからうか。後述のように、「江」には単に「大きな川」という意味もあるのです。『三國名勝図会』がいうように、単に「黒川の別称が錦江」と解釈すればよいのではなからうか。その傍証として、江戸時代に「錦江」が明確に海を指した用例が見出せないこともあげられる。他に、『加治

木物語』¹⁸⁾「加治木風土記」¹⁹⁾等にもほとんど同じ記述があり、一九二二年に発行された『加治木郷土誌・改訂版』にも継承されている。

ところで、「錦江」を黒川の別称として使用した実例に高山彦九郎の『筑紫日記』寛政四年(一七九二)五月二五・二六日条がある。二五日に彦九郎は現在の始良郡始良町と加治木町の境の別府川を渡り、柁城(加治木)に入っている。網懸橋²⁰⁾を渡り林宇兵次の所に宿泊している。この柁城では、家久の和歌を聞いて、「波の折かくもうつくし筑紫瀉つきぬ詠めの錦江の里」と詠んでいる。

翌日宿を発った後、町を出て「錦川」を越えて、「錦江の辺にて鹿兒島諸君へ送り侍りて」歌を詠んでいる。そして、龍口坂²¹⁾を登っている。この「錦川」も「錦江」も地理から考えて、黒川(日本山川)を指していることは明らかである。「川」と「江」は同じ意味で使用されている。また彦九郎の詠んだ歌に見える「錦江の里」も、海を指すというよりも、「錦江」黒川「帯」の里を詠んだものではなからうか。²²⁾

二 明治時代以降の鹿兒島湾

前節では江戸時代を対象に分析したが、未だ「錦江」が鹿兒島湾または鹿兒島湾の一部の海を指す言葉としては定着していなかったことを明らかにした。本節では、明治以降の状況を見ていく。

【表1】は諸種の資料に鹿兒島湾がどのように表記されているのか、可能な範囲で調べたものである。現在までのところ、最も古いのは、文久三年(一八六三)の薩英戦争の際に、イギリス側が作成した海図にある「KAGOSIMA BAY」(《1》)：【表1】の番号に対応、(以下同)という表記である。ほぼ同じ頃、鹿兒島に来たイギリス人医師ウィリアム・ウィリスが弟のジョージに宛てた書簡にも「The Bay of Kagoshima」

【表1】資料に見える鹿児島湾の表記

No.	年 月 日	西暦	鹿児島湾の表記	出 典
1	文久3・8・15	1863	KAGOSIMA BAY	「薩英戦争鹿児島湾海図」
2	文久3・8・26	1863	The Bay of Kagoshima	ウィリアム・ウィリス書簡 (George宛て)
3	?		鹿児島湾	「鹿児島湾戦争図」
4	明治4～同8	1871 1875	裏海	榊山資雄他編『薩隅日地理纂考』1898年
5	明治4・5・19	1871	鹿児島湾	「ウエルリス氏開闢嶽ニ登ル記」(『丁丑日誌(上)』)
6	明治5・4・6	1872	鹿児島湾	「種子島家譜八十六」(『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ9』) 実際の編集は1877年以降
7	明治8・3・8	1875	鹿児島湾	「種子島家譜八十六」(『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ9』) 実際の編集は1877年以降
8	明治10・5・2	1877	鹿児島湾	「鹿児島県日誌第二」(『丁丑日誌(上)』)
9	明治10・5・15	1877	鹿児島湾	「種子島家譜八十七」(『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ9』) 1888年までに編集終了
10	明治10・6・29	1877	鹿児島湾	「黒木為楨日記」(『鹿児島県史料西南戦争第1巻』)
11	明治12・1・15	1879	鹿児島前湾・鹿児島湾	『丁丑野乗』
12	明治12・10	1879	鹿児島湾	大槻修三編『鹿児島県地誌略巻一』
13	明治13・1	1880	鹿児島湾	『改正小学日本地誌略巻下』
14	明治14	1881	裏海	「かこしま案内」(『鹿児島市史Ⅲ』573頁, 1971年)
15	明治15・4・4	1882	鹿児島湾	「鹿児島新聞」
16	明治15～同17	1882 1884	鹿児島湾	「鹿児島県地誌」
17	明治17・3	1884	内海	佐藤毅毅『鹿児島県管内小学地誌巻之上』
18	明治17・10・20	1884	鹿児島湾	「鶴嶺雜誌」(『鹿児島市史Ⅲ』595頁, 1971年)
19	明治17・11・5	1884	鹿児島湾	「種子島家譜八十八」(『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ9』)
20	明治24・8・22	1891	錦湾	「鹿児島新聞」
21	明治24・11・3	1891	錦江	「鹿児島毎日新聞」
22	明治25・2	1892	鹿児島湾	鹿児島県尋常師範学校編『改正鹿児島県地誌略巻之上・下』
23	明治31・4	1898	鹿児島湾	鹿児島県私立教育会編『訂正鹿児島県地誌全』
24	明治31・8・3	1898	鹿児島湾	「薩摩見聞記」357頁(『日本庶民生活史料集成』第12巻, 世相1, 三一書房, 1971年)
25	明治31	1898	錦江	木脇啓四郎『萬留』(原口泉他編『薩摩藩文化官僚の幕末・明治』82頁, 岩山書院, 2005年)
26	明治33・3・31	1900	鹿児島湾	吉田東伍『大日本地名辞書 中国・四国・西国』1836頁, 富山房
27	明治34・10・25	1901	錦江	第七高等学校校歌(『北辰斜にさすところ』26・27頁, 1970年)
28	大正3・1・13	1914	鹿児島湾	「桜島爆発日誌」(『国分郷土誌資料編』)
29	大正3・2・2	1914	鹿児島湾	「桜島噴火ノ記」88頁(『垂水市史料集【八】牛根編』垂水市教育委員会)
30	大正3・3	1914	錦湾	「桃岡八田先生幽栖之地」(『鹿児島市史Ⅲ』797頁, 1971年)
31	大正6・3	1917	鹿児島湾	「薩英戦争記念碑」(『鹿児島市史Ⅲ』760頁, 1971年)
32	大正7・10・20	1918	錦江湾	「義弘公三百年記念加治木案内記」義弘公三百年記念会
33	大正8	1919	錦江	西寮寮歌「十九世紀の」(『寮歌集』7頁)
34	大正9	1920	錦江	対五高戦応援歌「雲低迷の」(『寮歌集』18頁)
35	大正10・1・1	1921	錦江湾	「柁城」第55号, 12頁, 大隅加治木同郷会
36	大正11・7	1922	鹿児島湾	「勅撰文神道之碑文」(『鹿児島市史Ⅲ』855頁, 1971年)
37	大正12・3	1923	錦江湾・鹿児島湾	小島文鼎「薩摩の廃仏と其の復興」456・463頁(辻善之助他編『新編明治維新神仏分離史料第10巻九州・沖縄編』名著出版, 1984年)
38	昭和元・3	1926	錦江湾	「史蹟名勝天然記念物調査報告」第1輯, 鹿児島県
39	昭和元	1926	錦江	対五高戦応援歌「朝日に燃ゆる」(『寮歌集』23頁)
40	昭和2・3	1927	鹿児島湾・鹿児島海湾	「桜島大正噴火誌」219・220・223頁, 鹿児島県
41	昭和3～4	1928 ～29	鹿児島湾	公爵島津家編纂所編『薩藩海軍史中巻』原書房, 1968年
42	昭和4	1929	鹿児島湾	山崎五十磨「鹿児島県下石器時代の遺跡並に古墳分布の大系」2・3頁(『鹿児島県史蹟名勝天然記念物調査報告書史蹟之部』第2輯)
43	昭和5・7・16	1930	鹿児島湾・錦江湾	「鹿児島新聞」
44	昭和5・10・1	1930	錦江湾	「三州」第11年第10号, 23頁
45	昭和6・6・5	1931	錦江	「加治木物語」74頁, 加治木町同盟教育会
46	昭和9	1934	鹿児島湾・錦江湾	「鹿児島県郷土小誌」4・10・17・40・54頁
47	昭和10・1・26	1935	鹿児島湾	「鹿児島新聞」
48	昭和10・2	1935	鹿児島湾	「郷土教育資料鹿児島県地誌」135頁, 鹿児島市役所
49	昭和10・4・30	1935	錦江湾	「鹿児島市観光パンフレット」鹿児島市観光協会
50	昭和11	1936	錦江	林吉彦「築城史より見たる鹿児島城」11頁(『鹿児島』第2巻第9号)
51	昭和14	1939	鹿児島湾	「鹿児島県史第1巻」9頁
52	昭和15?	1940	鹿児島湾	「神武天皇聖蹟高千穂宮に関する研究」192・3頁(紀元二千六百年鹿児島県奉祝会「神代並神武天皇聖蹟顕彰資料」)
53	昭和23・6・21	1948	錦江湾	「高隈演習林払下に関する牛根利請願の件」(『垂水市史料集【八】牛根編』垂水市教育委員会)
54	昭和30・1・25	1955	鹿児島湾	「岩波写真文庫137・鹿児島県一新風土記」岩波書店, 1987年(復刻版発行)
55	昭和30・5・30	1955	鹿児島湾・錦江湾	「鹿児島のおいたち」鹿児島市
56	昭和34・4・26	1959	錦江	「寺山之賦」(『鹿児島市史Ⅲ』836頁, 1971年)

《2》と見える。やや遅れて《5》でも「鹿児島湾」を用いている。

そもそも鹿児島湾周辺に住む人々にとって、鹿児島湾という内海をわざわざ「鹿児島」という地名を冠して呼ぶ必要はない。例えば、江戸時代に書かれた『本藩地理拾遺集』・『本藩人物誌』等の「本藩」の使用方法と同じである。鹿児島以外に住む他者が、鹿児島湾という内海を他と区別して認識するために、語頭に「鹿児島」を付けたものと思われる。

《6》《7》は明治一〇年（一八七七）以降の編纂物であるので、今のところ「鹿児島湾」の初見資料は《8》ということになる。これ以後、表を一瞥すると基本的に「鹿児島湾」と書かれることが多いようである。「鹿児島湾」が正式名称であるという認識が存在するからであろう。明治五年（一八七二）に鹿児島港を測量し、同七年（一八七四）に海図が、同一九年（一八八六）に水路誌「薩隅内海之図」が刊行されている。鹿児島県ができてからの海図は「鹿児島湾」と表記されていた。²⁵

これらのことから考えると「鹿児島湾」という呼称の成立は、《8》を少し遡る頃であろうと思われる。《4》の「裏海」等は江戸時代的表現であり、まだこのころ「鹿児島湾」という定まった名称がなかったことを窺わせる。《12》の大槻修二編『鹿児島県地誌略卷一』には、鹿児島湾という名の由来を、「湾中ノ一島ヲ大隅ノ桜島トス、鹿児島港其西北岸ニ臨ムヲ以テ、此内海ノ定名トナル」と説明している。

それでは、もう一方の「錦江（湾）」の成立は何時であろうか。今のところ、「錦江」が海を指す言葉として使用された初見は、《20》の新聞記事である。この記事には「錦湾」とあるが、「錦江湾」の略であろう。水也亭主人の「十時間旅行記」という記事の中で使用されていて、客観的というよりは、どちらかというところ、叙情的・文学的表現として用いら

れている。次の《21》も『鹿児島毎日新聞』が発刊された際の、「祝詞」
「甕島毎日新聞の発刊を祝す」等の文章中で使われている。

「錦江湾」の初見資料が明治二四年（一八九一）であると述べたが、「錦江」が江戸時代に海を指す言葉として使用された例が今のところ見出せないことから、海を指す「錦江」の成立は、明治に入ってから同一四年までの間ということになる。この間に黒川の別称であった「錦江」が海を指す言葉に転化したのである。この事情を資料的に明確にすることは難しいが、いくつかの資料から若干の推測は可能である。それはまず、「錦江」を雅号として使用する人物が登場することである。伊東蒙吉²⁶がその人で、明治一〇年（一八七七）の野紙、同一三年（一八八〇）の『満州紀行稿』、同一六年（一八八三）の『旗艦乗員簿及諸例則拔萃』に使用例が見出された。²⁷また、「錦江義塾」・「汽船錦江丸」・雑誌「錦江」・「錦江新聞社」²⁸等が管見に入った。これらは黒川の別称としての「錦江」とは異なる使用例であり、この頃既に海を指す「錦江」が使われていたのかもしれない。しかし、海を指す「錦江」を使用するのは右にみたように、かなり特殊な場合に限られたので、なかなか文字として残りにくいというのが現実のところであろう。

《20》以降、海を指す「錦江（湾）」が資料上に散見されるようになる。まず、《27》《33》《34》《39》等のように歌詞で使用される場合、
《30》《56》等のように記念碑の碑文で使用される場合、《21》のように新聞創刊の祝詞として使用される場合、《49》のように観光で使用される場合等があった。²⁹

なかでも《46》のように同一の資料のなかで両者を併用しているものにその特色が表れているようである。すなわち、「鹿児島湾」は地質を

説明する場合に使用され、「錦江湾」は文学的な説明をする場合にと
 いうように使い分けられていることが判明する。しかし、一方で
 《37》《43》《55》のように同一の資料の中で、両者を併用している場
 合であっても、使用方法に明確な基準が見出せないものもある。最終
 的には使用する人の好みに拠るところが大きかったようである。とも
 あれ例外も多いのだが、大まかには両者が使い分けられる一定のルー
 ルが存したようである。それは、「錦江」という言葉が持つ漢語的な
 ニュアンスに拠るところが大きいと思われる。

明治二四年（一八九一）頃から海を指す言葉として使用された「錦
 江（湾）」は、やがて「錦江橋」・「錦江橋通」・「錦江町」等として使
 用されるようになり、次第に市民権を獲得していったものと思われる。

三 地図上に見える鹿児島湾

続いて地図上の表記について考えてみたい。【表2】は、明治一〇
 年（一八七七）から平成一四年（二〇〇二）まで管見に入った地図で、
 鹿児島湾の表記がどのようになっているのかを調べたものである。江
 戸時代の地図には、鹿児島湾の名称は記載されていないので、この表
 の「1」～「2」（【表2】の番号に対応、以下同）に登場するのが今の
 ところ初見である。この年は西南戦争が起きているが、当時はまだ
 精密さに欠ける地図であったので、作戦の遂行や糧秣の輸送に不便を
 来した。そこで、その反省に鑑みて、翌年に参謀本部を設置し、地図
 課・測量課を置いて精度の高い迅速測図の作成に着手した。戦争が契
 機となって地図が進歩した。⁽³⁶⁾【表1】で見た「鹿児島湾」の初見と地
 図における初見が一致する。地図作製がきっかけで、「鹿児島湾」と
 いう呼称が付けられたのかもしれない。ただし、「3」のように、記

【表2】地図に見える鹿児島湾の表記

No.	年 月 日	西暦	鹿児島湾の表記	出 典
1	明治10・4	1877	鹿児島湾	『西海道全図』陸軍参謀局
2	明治10	1877	鹿児島湾	『鹿児島県実測図』陸軍参謀部（『明治大正図誌15』102頁）
3	明治12・10	1879	記載なし	『鹿児島県全図』（出版人伊地知貞鑒）
4	明治14	1881	鹿児島湾	『大日本国全図』内務省地理局編（『太陽コレクション地図西海道・南海道』14頁）
5	明治27・3・7	1894	鹿児島湾	『大日本管轄分地図 鹿児島管内全図』
6	明治36・5・5	1903	鹿児島湾、一名錦江湾	『訂正詳密鹿児島県新地図』4版訂正
7	明治44・3・15	1911	鹿児島湾	『九州地方近県旅行地図』
8	大正元・8・30	1912	鹿児島湾	『桜島』5万分1地形図、大日本帝国陸地測量部
9	大正7・6・30	1918	鹿児島湾	『鹿児島北部地図』
10	大正8・9・30	1919	鹿児島湾	『鹿児島』20万分1地形図、大日本帝国陸地測量部
11	大正9・7・30	1920	鹿児島湾	『鹿児島地図』
12	大正14・4	1925	鹿児島湾	『鹿児島県地図』山下広盛堂
13	昭和10・8	1935	鹿児島湾	『十万分一昭和十年特別大演習地図第二号』大日本帝国陸地測量部
14	昭和10	1935	鹿児島湾	『鹿児島県地図』鹿児島印刷株式会社
15	昭和15・1	1940	鹿児島湾	『鹿児島県地図』
16	昭和20	1945	鹿児島湾	『集成五万分一地形図鹿児島第一号』参謀本部
17	昭和21・10・30	1946	鹿児島湾	『鹿児島五万分一地形図』地理調査所
18	昭和22頃?	1947	鹿児島湾	『鹿児島県地図』日本地図株式会社
19	昭和34・5・5	1959	鹿児島湾	『最新鹿児島県大地図』日本教図株式会社
20	昭和38・11・1	1963	錦江湾	有村文寿編『精密住宅案内図（第三版）鹿児島市・谷山市』東京交通社
21	昭和43	1968	鹿児島湾・錦江湾	『ゼリンの住宅地図鹿児島市'68 全市版』善隣出版社
22	昭和44	1969	鹿児島湾・錦江湾	『ゼリンの住宅地図鹿児島市'69 全市版』善隣出版社
23	昭和46・8	1971	鹿児島湾（錦江湾）	『最新鹿児島市地図』和楽路屋
24	昭和47～同50	1972 ～75	鹿児島湾（錦江湾）	『大型精密分県地図鹿児島県』人文社
25	昭和48	1973	鹿児島（錦江）湾	『大日本分県地図併地名総覧』
26	昭和55	1980	鹿児島湾・鹿児島湾（錦江湾）	『最新版ガイド鹿児島市』塔文社
27	昭和59・12	1984	鹿児島湾（錦江湾）	『縮小版'85年版鹿児島市住宅地図』MBC開発
28	昭和61・10・20	1986	鹿児島湾（錦江湾）	『最新版鹿児島万能地図』南日本新聞社
29	平成8・4	1996	鹿児島湾（錦江湾）	『鹿児島県広域道路地図』福岡人文社
30	平成8・10・1	1996	鹿児島湾（錦江湾）	『日本分県地図地名総覧』人文社
31	平成9・6・23	1997	鹿児島湾（錦江湾）	『最新版鹿児島県万能地図多機能エリアマップ』南日本新聞社
32	平成11・5・10	1999	鹿児島湾（錦江湾）	『地図で訪ねる歴史の舞台一日一本、最新版』帝國書院
33	平成14・1	2002	鹿児島湾（錦江湾）	『別冊マップル46 鹿児島県広域詳細道路地図』昭文社
34	?	?	鹿児島湾	鹿児島県土木部『鹿児島県管内図』東昌文化研究所
35	?	?	鹿児島湾	『精密鹿児島県大地図』坂口文光堂

載のない地図もあったりして、まだこの頃「鹿児島湾」の呼称が完全に定着していなかったようである。

その後、ずっと「鹿児島湾」と記した地図が続くが、へ6～だけは特殊で、「鹿児島湾一名錦江湾」と書かれている。この地図をよく観察してみると、著者は蓑田岩太郎（鹿児島市加治屋町八四番戸宅号）・発行者は吉田幸兵衛（鹿児島市仲町）・発売所吉田文蔵堂（鹿児島市仲町）と書かれている。鹿児島市在住の著者が、鹿児島市の発売所から発行している地図である。地元著者が関与しているので、「鹿児島湾」とだけ書かずに、「一名錦江湾」を付け加えたのであろう。「錦江湾」という文言は、なかなか文字資料としては残りにくい性格を有していたと思われる。しかし、この文言を著者がわざわざ追加したのは、地元ではかなり定着していた名称であったと推測され、地元の間人であるからこそあっさり「鹿児島湾」とだけ書けなかったのであろう。従って、地図上に見える表記の仕方は、地元の人々が実際に使用している表現とは、乖離していた可能性が少なからずある。

このへ6～以降、一貫して「鹿児島湾」という表記が使用され続けているが、変化が表れるのはへ20～からである。へ20～では「錦江湾」が単独で使用され、へ21～以降、「鹿児島湾」「錦江湾」が併記されるタイプが定着している。現在使用されている地図のほとんどは、この併記のタイプであると思われる。へ19～以前は「鹿児島湾」が一般的であったものが、何故このような併記のタイプに変わったのであろうか。

恐らく、「鹿児島湾」単独表記の時期は、あくまで「鹿児島湾」が正式で、「錦江湾」は正式でない、非公式な表現であるという意識が働いていたものと思われる³⁷。前項で指摘したように「錦江湾」は、文学的

な表現や観光等で地元で使用される用語だったのであろう。その正式でない表現が、やがて市民権を得るようになり、正式表現の「鹿児島湾」を凌駕するようになってきた。このような状況が、地図上の表記として表れたのが、両者併記の表現方法だったのであろう。

鹿児島湾の場合は、正式でない「錦江湾」が正式な「鹿児島湾」を駆逐していったが、これとは反対に志布志湾の場合は対照的である。明治三九年（一九〇六）の『鹿児島近傍地図』では、「有明湾」とあり、昭和三四年（一九五九）のへ19～まで使用されている。発行年不詳の『精密鹿児島県地図』（坂口文光堂発行）では、「有明（志布志）湾」のように併記されている。しかし、この「有明湾」という表現は地元では根付かず、やがて「志布志湾」に取って替わられるようになる³⁸。清水氏が、「庶民の支持、愛着がないと地名は定着しない」と言われたが、その典型的な事例といえよう。

本題に戻ろう。ここで問題となるのは、何故地図上に両者を併記する書き方に変化したのか。その契機は何かということである。昭和三八年（一九六三）頃を境に表現方法が変化したのは何故であろうか。この問題については、既に川寄兼孝氏が「錦江の呼称の由来」のなかで、昭和三〇年（一九五五）に鹿児島湾とその沿岸地域が「錦江湾国定公園」に指定されたことにより、学校用の地図帳が「鹿児島湾（錦江湾）」と表記されるようになったと指摘されている。筆者はこの頃の学校用の地図帳を実見していないので、国定公園指定と地図上の表記の変化が関連するのか断定はできない。しかし、へ19～は国定公園指定以後のことであるが、表記は「鹿児島湾」のままである⁴⁰。川寄氏の説は「鹿児島湾」と「錦江湾」の併記のきっかけの一つと捉えておきたい。ちなみに、昭

和三九年（一九六四）三月、錦江湾・屋久島地域が霧島国立公園に編入され、新たに「霧島屋久国立公園」という名称になり、名称そのものからは「錦江湾」が消えている。

この頃、地名や学校名に「錦江」が用いられ始める。鹿児島市の錦江町が昭和三八年（一九六三）から、「錦江通」は昭和四四年（一九六九）頃で使用されている。また、垂水市の錦江町も昭和四四年から使用されている。きわめつけは、「錦江湾」を校名に持つ県立高校が誕生したことである。昭和四五年（一九七〇）に「鹿児島県立錦江湾高等学校」の校名が決定され、翌年開校している。

また、小中学校で歌われる校歌の影響も少なくない。幼少の頃から、「錦江（湾）」の歌詞を歌ってきた人々にとってみれば、「鹿児島湾」ではなく「錦江湾」でなければならなかった筈である。

そこで、小中学校の校歌で「錦江（湾）」が詠われている学校を一覧表にしてみた。⁴³【表3】が小学校、【表4】が中学校である。これらの表から、小学校で四八校、中学校で三一校、合計七九校が確認できた。これらの学校は、鹿児島湾沿いの鹿児島市・旧吉田町・旧喜入町・指宿市・始良町・加治木町・旧隼人町・旧国分市・旧福山町・垂水市・鹿屋市・旧大根占町・旧根占町・旧佐多町に分布している。制定された年代も、昭和二〇年代の後半から五〇年代に及んでいるようである。

また、鹿児島・宮崎間を運行するJR列車の名称にも「錦江」が見える。昭和三五年（一九六〇）に西鹿児島駅・山川駅間を運行する準急列車として初登場し、翌年には宮崎駅まで延長された。平成七年（一九九五）にその名称が廃止されるまで、多くの人々に親しまれた列車であった。⁴⁵

以上、国定公園・地名・学校名・校歌・JR列車の名称等を事例として上げたが、探し出せば他にも見出せるであろう。重要な点は、右の事例がおおよそ昭和三〇年代から四〇年代頃に集中的に表れるということ、この時期が、「錦江（湾）」が鹿児島県で定着していく画期となっているようである。

右のような事例が積み重なって、「鹿児島湾」と呼ぶ県外の人々に対して、鹿児島に住む人々の「錦江湾」と呼ぶ意識が形成されてきたのではなからうか。江戸時代の島津家久の和歌に端を発したといわれる「錦江」は、四〇〇年の時を経て、湾の名称として定着し、更に地元に住む人々が愛着を持って使用する言葉へと変化を遂げたのである。現代では、「錦江」は様々な名称に使用され、鹿児島の人々のアイデンティティを支える重要な言葉へと変化したのである。

むすび

最後に、本稿で述べたことを箇条書きにまとめてむすびとしたい。

①江戸時代末に至るまで鹿児島湾を指す固有名詞は存在しなかった。鹿児島湾のことを表現する必要がある場合は、「内海」を表す普通名詞を使用した。

②「黒川記」を検討した結果、島津家久の和歌がきっかけで黒川に「錦江」という別称が生じたことがわかった。この和歌から、黒川とその前面に広がる海が「錦江」と呼ばれるようになったと理解する通説は、論理に飛躍があり受け入れられない。また高山彦九郎の『筑紫日記』には、黒川の別称として「錦江」「錦川」が使用されていたことが確認できた。

④【表1】の検討の結果、「鹿児島湾」という呼称の成立は明治一〇年（一八七七）頃と考えられる。諸資料の使用例を検討すると、「鹿児島

【表3】校歌に「錦江（湾）」が登場する小学校一覧

小学校名	所在地	歌詞区分	制定年	左の典拠
吉野東	鹿児島市吉野町	A		
大明丘	鹿児島市大明丘	A		
坂元	鹿児島市玉里団地	A		
名山	鹿児島市山下町	B		
松原	鹿児島市南林寺町	B		
城南	鹿児島市城南町	B	昭和34（1959）	H P
草牟田	鹿児島市城山	A	昭和26（1951）	H P
明和	鹿児島市明和	A		
西陵	鹿児島市西陵	A	昭和54（1979）	H P
八幡	鹿児島市下荒田	B	昭和29（1954）	H P
鴨池	鹿児島市真砂本町	A	昭和29（1954）	H P
宇宿	鹿児島市宇宿	A	昭和40（1965）	H P
玉江	鹿児島市下伊敷	A		
東桜島	鹿児島市東桜島町	A		
錦江台	鹿児島市錦江台	錦江台	昭和56（1981）	H P
東谷山	鹿児島市魚見町	B	昭和54（1979）	H P
平川	鹿児島市平川町	B		
桜丘西	鹿児島市桜ヶ丘	A		
桜丘東	鹿児島市桜ヶ丘	A	昭和57（1982）	H P
鹿大附属	鹿児島市郡元	B		
桜峰	鹿児島市桜島松浦町	B		
桜洲	鹿児島市桜島小池町	B		
牟礼岡	鹿児島市牟礼岡	A		
瀬々串	鹿児島市喜入瀬々串町	B	昭和33（1958）	『喜入町郷土誌』356頁
中名	鹿児島市喜入中名町	A	昭和30（1955）	『喜入町郷土誌』361頁
前之浜	鹿児島市喜入前之浜町	B	昭和30（1955）	『喜入町郷土誌』373頁
一倉	鹿児島市喜入一倉町	B		
指宿	指宿市西方	A	昭和31（1956）	H P
魚見	指宿市東方	B		
柳田	指宿市十町	A		
丹波	指宿市湯の浜	A	昭和34（1959）	H P
国分南	霧島市国分下井	A		
柁城	始良郡加治木町仮屋町	B	昭和28（1953）	渡部論文
錦江	始良郡加治木町錦江町	B		
加治木	始良郡加治木町反土	A		
帖佐	始良郡始良町帖佐	A		
建昌	始良郡始良町東餅山	B		
西始良	始良郡始良町西始良	A	昭和59（1984）	『始良町郷土誌増補改訂版』394頁
富隈	霧島市隼人町真孝	B	昭和33（1958）	H P
垂水	垂水市田神	B		
柗原	垂水市柗原	B		
協和	垂水市海潟	A		
松ヶ崎	垂水市牛根麓	A		
古江	鹿屋市古江町	A		
菅原	鹿屋市天神町	A		
高須	鹿屋市高須町	B		
宮田	肝属郡南大隅町根占山本	B		
登尾	肝属郡南大隅町根占辺田	A		

※春日三郎編『鹿児島県校歌集小学校の部1・2』1995年より作成。

※歌詞区分欄の「A」は錦江湾, 「B」は錦江を示す。以下同。

・「H P」=各学校のホームページを表す。以下同。

・渡部論文=渡部恒夫「埋もれた錦江湾の語源の謎(5)」(『鹿児島経大論集』第35巻第3号, 1994年)

「湾」は正式な名称で、客観的な文章で使用されることが多く、「錦江湾」は文学・観光・歌詞などで使用されることが多かったようである。最終的には使用する人の好みに左右されることが大きかったと推測される。

⑤江戸時代、黒川の別称であった「錦江」は、明治二四年（一八九一）頃から海を指す言葉として使用され始める。これより以前、「錦江」が雅号・塾・汽船・雑誌・新聞社等の名称として使用された事実が知られるので、黒川の別称↓固有名詞↓鹿児島湾の別称へと変化を遂げていったと考えられる。「錦江湾」の名称が成立すると、やがて橋・通り・町名などに使用されるようになり、次第に市民権を獲得していった。

⑥地図上に登場する「鹿児島湾」の成立は、【表1】と同様に明治一〇年（一八七七）であった。西南戦争が契機となって「鹿児島湾」という呼称が生まれた可能性がある。以後、基本的に地図の上では、「鹿児島湾」と表記されるのが一般的となる。但し、地元鹿児島市で発行された地図には、「鹿児島湾」「名錦江湾」と表記する地図もあり、地図上の表記と地元の人々が実際に使用している表現とは乖離している可能性がある。

⑦地図上で「錦江湾」を単独で使用した初見は、昭

【表4】校歌に「錦江（湾）」が登場する中学校一覧

中学校名	所在地	歌詞区分	制定年	左の典拠
吉野東	鹿児島市吉野町	A	昭和58 (1983)	HP
長田	鹿児島市小川町	B		
明和	鹿児島市明和	A	昭和53 (1978)	校歌集
武	鹿児島市武	A	昭和45 (1970)	HP
天保山	鹿児島市下荒田	A		
鴨池	鹿児島市真砂本町	A	昭和36 (1961)	HP
南	鹿児島市東郡元町	B		
西紫原	鹿児島市西紫原	A	昭和54 (1979)	HP
谷山	鹿児島市上福元町	A	昭和27 (1952)	HP
東谷山	鹿児島市魚見町	A		
和田	鹿児島市和田	A	昭和32 (1957)	校歌集
桜丘	鹿児島市桜ヶ丘	A		
鹿児島	鹿児島市城西	A		
志学館	鹿児島市南郡元町	B		
桜島	鹿児島市桜島藤野町	A	昭和28 (1953)	校歌集
喜人	鹿児島市喜人町	A	昭和49 (1974)	『喜入町郷土誌増補改訂版』425頁
生見	鹿児島市喜人生見	B	昭和32 (1957)	『喜入町郷土誌』389頁
国分	霧島市国分清水	A		
国分南	霧島市国分下井	A		
重富	始良郡始良町平松	B	昭和24 (1949)	校歌集
隼人	霧島市隼人町真孝	B		
福山	霧島市福山町福山	B		
牧之原	霧島市福山町福山	B		
協和	垂水市中俣	B	昭和28 (1953)	HP
牛根	垂水市二川	B		
高須	鹿屋市高須町	A		
花岡	鹿屋市古里町	A	昭和28 (1953)	校歌集
神川	肝属郡錦江町神川	A	昭和30 (1955)	『大根占町誌』597頁
根占	肝属郡南大隅町根占山本	B		
登尾	肝属郡南大隅町根占辺田	B		
第一佐多	肝属郡南大隅町佐多伊座敷	A		

※鹿児島県中学校教育研究会音楽部会編『鹿児島県中学校校歌集』1996年より作成。

※典拠欄の「校歌集」は『鹿児島県中学校校歌集』を示す。

和三八年（一九六三）であり、以後「鹿児島湾」と「錦江湾」は併記されるタイプが定着していく。この理由には色々考えられるであろうが、一つには昭和三〇年（一九五五）に鹿児島湾とその沿岸地域が「錦江湾国定公園」に指定されたこと、地名、学校名、小中学校の校歌、JRの列車の名称等で使用されていくようになり、次第に市民権を得ていった。やがて地元で、「鹿児島湾」を凌駕するようになっていったものと考えられる。現在では、「錦江」は様々な名称にも使用され、鹿児島に住む人々のアイデンティティーを支える重要な言葉へと変化を遂げた。

註

(1) 鹿児島県「地名の由来」<http://www3.pref.kagoshima.jp/gaiyo/rekishi-bunka/bunka/yurai.html>

(2) 肝属郡大根占町と田代町が合併して、二〇〇五年に肝属郡錦江町が誕生した。

(3) 鹿児島市に錦江町・錦江台、垂水市に錦江町、始良郡加治木町に錦江町がある。

(4) かつて鹿児島市の名山堀に錦江橋があった。

(5) 錦江橋が架かっている通りを錦江橋通、鹿児島大学水産学部前の現国道二二五号線を錦江通りと呼んだ。

(6) 鹿児島県立錦江湾高等学校・鹿児島市立錦江台小学校・加治木町立錦江小学校など。

(7) 試みに鹿児島県鹿児島・日置版の『ハローページ（企業名）』二〇〇六年を調べてみると、塗料・印刷・ホテル・ゴルフクラブ・書店・不動産・薬局・布団店・公園・建設会社等四〇余りが載っている。

る。

(8) 薩摩半島と大隅半島間に位置する湾を呼称する場合、このように表記する。資料上の表記の場合には「」を付す。

(9) 錦江湾の由来に関する先行研究には以下のようなものがある。渡部恒夫「埋もれた錦江湾の語源の謎（一）」（五）（『鹿児島経大論集』第三四巻第三号・四号、第三五巻第一号・二号・三号、一九九三・四年）・川崎兼孝「錦江の呼称の由来」（『文化協会だより』第二五号、加治木町文化協会、二〇〇三年）・「南風録」（『南日本新聞』二〇〇四年五月一四日）・清水哲男「鹿児島国道をゆく・第一回 庶民の愛した錦江」（『南日本新聞』二〇〇四年七月一七日）。渡部氏の研究は、錦江に関する先学の指摘を多く収録してあり有益である。

(10) 『西遊雑記巻之四』、寛政元年（一七八九）成立（『日本庶民生活史料集成』第二巻、三一書房、一九六九年）・『薩藩名勝志（その一）』、文化三年（一八〇六）成立（『鹿児島県史料集』（42））。

(11) 『西遊記』、天保二年（一八四一）成立（『東路記・己巳紀行・西遊記』へ新日本古典文学大系98、岩波書店、一九九一年）。

(12) 『三国名勝図会』巻之一、天保一四年（一八四三）成立。「裏海」とは「うちうみ、内海」を表す普通名詞である（『大漢和辞典縮写版巻一〇』大修館書店、一九七六年）。

(13) 『三国名勝図会』巻之二。

(14) 江戸時代には「湾」という概念が存在していなかったのではないかと、反論が予想されるが、『三国名勝図会』巻之一五に鷹口海湾（説明には鷹口湾とのみある。現阿久根市高之口港）が見える。

海湾とは「海が陸地に入り込んでいる所。陸地に入り込んでいる海。入り海。湾。」(『日本国語大辞典第四卷』三一六頁)のことであるので、江戸時代にも湾の概念は存在していた。但し、鷹口海湾と鹿兒島湾では規模が全く異なることから、江戸時代の「(海)湾」は鹿兒島湾のように大きな内海を指す言葉ではなかったかもしれない。

(15) 加治木郷土誌編纂委員会編『加治木郷土誌』三〇九頁、一九六六年。

(16) 前註(9)。

(17) 『大漢和辞典縮写版卷六』九一七頁。

(18) 加治木町同盟教育会編輯発行、一九三二年。

(19) 加治木町老人クラブ連合会編集発行、一九八三年。

(20) 萩原進・千々和美編『高山彦九郎全集第四卷』高山彦九郎遺稿刊行会、一九五四年。

(21) 現在は「網掛橋」。加治木町錦江町と本町の間、網掛川に架かる橋。

(22) 日木山川を越えて国分方面に国道一〇号線を登った坂。

(23) 「錦江」を漢和辞典で調べてみると、中国や韓国の川の名称として登場する。①中国江西省餘江縣の南、信江の下流。②瑞河の別称、

一名蜀水。③四川省郫県の西で岷江から分かれて東流し郫江に合流

する。別名流江・汶江、俗称府河・走馬河という。(『大漢和辞典縮

写版卷十一』五八〇頁)、④韓国全羅北道長水郡に源を發し、湖南

平野北部を流れて黄海に入る川(『広辞苑第五版』七二九頁)。従っ

てこの言葉自体に、漢語的なニュアンスが含まれていることに注意しておきたい。

(24) 同年八月に朝廷の御用船が鹿兒島港内を測量するので、見物などして差し障りがないようにという鹿兒島県庁の布告が出されている(『鹿兒島県史料忠義公史料第七卷』四六八号)。

(25) 前掲清水「庶民の愛した錦江」。

(26) 幕末の陽明学者伊東祐之の長男、海軍畑を一貫して歩み、明治二〇年(一八八七)に海軍大佐にまでなっている。大平義行「幕末薩摩藩士・陽明学者伊東猛右衛門祐之とその家系」(『黎明館調査研究報告』第七集、一九九三年)参照。

(27) 錦江という雅号は他にも見られる。例えば、成嶋鳳卿(陸奥国出身、江戸幕府の儒官、『大漢和辞典縮写版卷五』一九頁)・文同(宋の人、書竹・詩文篆隸行草飛白皆の妙を極めた。『大漢和辞典縮写版卷五』五九一頁)・梁田邦彦(丹波篠山藩出身、安井息軒・川田甕江に師事。一九二二年没、『大漢和辞典縮写版卷六』三五七頁)等が知られる。

(28) 『鹿兒島新聞』明治十五年(一八八二)二月二日。

(29) 『鹿兒島新聞』明治十五年(一八八二)四月十四日。

(30) 明治十五年(一八八二)三月二日発刊(『鹿兒島市史Ⅲ』一九七一年)。

(31) 『鹿兒島毎日新聞』明治二十四年(一八九一)二月三日。

(32) 三省堂編集所編『コンサイス日本地名事典(第三版)』三省堂、一九九二年では、鹿兒島湾の別称錦江湾はとくに観光で使用すると説明している(二九二頁)。

(33) 明治二十七年(一八九四)の『大日本管轄分地図鹿兒島県管内全図』に見える。

(34) 明治三〇年（一八九七）の『鹿児島市街実地踏査図』（『太陽コロクシヨ』地図西海道・南海道）五一頁）に見える。

(35) 加治木町の町名で、明治三二年（一八九九）から使用されている（『角川日本地名大辞典46鹿児島県』二四七頁、角川書店、一九八三年）。

(36) 織田武雄『地図の歴史―日本篇』一六二―一六四頁、講談社、一九七四年。

(37) 前掲清水「庶民の愛した錦江」によれば、新聞表記では「錦江湾」は使用できず、正式名称である「鹿児島湾」を使用しなければならぬとある。

(38) 『三國名勝図会』卷之六十には、安政三年（一八五六）に遊行五三世尊如上人が詠んだ和歌「たぐひなや春も名残の月の影、浪白砂の有明の浦」が見える。

(39) 前掲清水「庶民の愛した錦江」。

(40) この地図は授業で使用される大型で壁に掛けて使用する地図である。

(41) 『角川日本地名大辞典46鹿児島県』二四七頁。

(42) 『鹿児島大百科事典』三三〇頁、南日本新聞社、一九八一年。

(43) ちなみに中学校の校歌に多く登場する地理用語は、一位黒潮、二位桜島に次いで、錦江湾は第三位になっている（前掲亮一「地域のランドマーク―『校歌』と『小島』と『道の駅』―」、『大河』第八号、二〇〇六年）。

(44) 校歌に歌われるのは殆ど全て「錦江（湾）」であるが、旧大根占町の大根占中学校だけは例外で、「鹿児島湾」と歌われている。珍

しい事例である。

(45) 「ありしま（列車）―Wikipedia」[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8D%E3%82%8A%E3%81%97%E3%81%BE_\(%E5%88%12D6](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8D%E3%82%8A%E3%81%97%E3%81%BE_(%E5%88%12D6))

【附記】本稿を成すに当たって以下の方々にご教示をいただきました。お名前を記して感謝の意を表します（敬称略）。

平田信芳・松田誠・福永明代・永山修一・早瀬明広・福留健之・有川敏恵

【追記】本稿校正中、阿瀧濱健一氏より高等学校の校歌集のコピーをいただいた。それによると、錦江湾（B）・武岡台（A）・松陽（B）・指宿商業（B）・加治木工業（A）・垂水（B）・鹿児島情報（A）・志学館高等部（B）・加治木女子（B）という結果であった。全一〇三校中九校で「錦江（湾）」が見られた。小中学校の校歌に比べて、高校の校歌では、地名や自然を歌詞に入れることが少なく、抽象的な用語が増加する印象を持った。

（本館学芸専門員）

